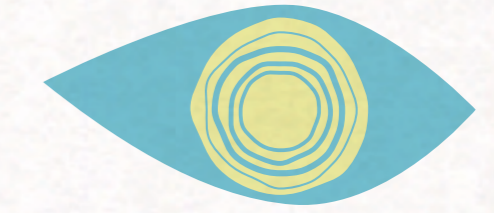
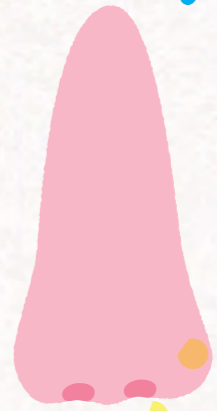




障害



と身体



る旅



## はじめに

STスポット横浜は、神奈川県横浜市にあるNPOです。「舞台芸術を中心としたアートと市民社会の新しい関係づくりを推進するとともに、アートの持つ力を現代社会に活かし、より豊かな市民社会を創出すること」を使命に、横浜市内で一番小さな劇場・STスポットを運営する芸術機関として1987年に活動を開始しました。2004年からは地域コミュニティに向けた活動を担う、地域連携事業部を設置し、学校でのアーティストによる授業実施や、民間の文化団体支援などを行っています。

劇場や学校、地域での活動においてアーティストとともに多様な芸術活動の可能性を探るなかで、昨年度から障害と身体表現をめぐる研究事業を進めています。今年度は、主に4つの活動を行いました。

- 横浜市内の障害福祉サービス事業所における文化芸術体験事業（ワークショップ）の実施
- 全国で行われている障害者と身体表現についての活動視察および情報交換
- 障害・アート・身体をテーマにした勉強会
- 障害者と芸術家の取組みについての調査

障害と身体をめぐり、今年度もさまざまな人や新しい風景に出会いました。本誌では昨年引き続き、出会った人たちの言葉、年間を通して見たさまざまな風景をお届けします。

## 「障害と身体をめぐる旅」～実践編

ひふみ×ドゥイ（造形ユニット）「それぞれの時間を味わう」	02
みどり福祉ホーム×上村なおか（ダンサー、振付家）「からだに触れる、知る。」	04
障害・身体・アートを考える報告会「福祉施設での実践報告～芸術家とともに過ごす時間～」	06
障害・身体・アートを考える勉強会	
「子どもと子どもが交わること」	08
久保田菜々子（特定非営利活動法人芸術家と子どもたち コーディネーター）	
「さまざまな人が集う場所」	09
笹田夕美子（浜松市発達医療総合福祉センター 臨床心理士）	
「重度重複障害のある子どもたちと美術・音楽の関わり」	10
井上尚子（美術家）、柴山拓郎（音楽家）	
「知的障害のある子どもたちと演劇の関わり」	11
花崎攝（演出家）	
「ダンスと演劇から老いを見つめる」	12
砂連尾理（ダンサー、振付家）、西尾佳織（劇作家、演出家）	
座談会「からだから考える演劇」	14
認定NPO法人ニコちゃんの会×倉品淳子×古賀今日子	



ひふみ × ドゥイ

「それぞれの時間を味わう」

ひふみは、2011年に横浜市神奈川区六角橋にできた施設です。

精神障害のある人が地域の中で安心して生活するための

居場所づくりを目指しています。「カフェを開始するにあたって、

施設のアピールをするために看板をつくりたい」という要望をうけて、

造形ユニット・ドゥイのみなさんと4回、お伺いしました。

当初はアーティストが主に製作し、お手伝いをするような

イメージでいたのですが、つくり方を工夫することで、利用者の

みなさんも積極的に関わってくださいました。その結果、

自分たちのものを自分たちでつくっている実感を持つ取組みとなりました。

期間：2016年7月6日(水)、20日(水)、27日(水)、  
9月29日(木) (計4回)

時間：10:45～12:00、13:00～14:00

参加者：43名

施設名：地域活動支援センター ひふみ

アーティスト：ドゥイ(造形ユニット・小野亜斗子、轟岳)

施設情報：地域活動支援センター ひふみ

住所：横浜市神奈川区六角橋6-2-13

[http://www.ura-shima.com/sisetsu.html#hifumi\\_sisetsu](http://www.ura-shima.com/sisetsu.html#hifumi_sisetsu)



#### ドゥイ(造形ユニット)

小野亜斗子・轟岳によるユニット。1999年より5年間、絵画造形教室「アトリエ・ラビン」のスタッフとして勤務。(小野)2005年より轟が加わり、2007年3月まで深沢アート研究所/馬車道の土曜日コースを担当。2006年より、横浜・石川町の洗濯屋さん店舗跡を改装した「ドゥイの実験室」にて、こども造形教室をスタート。2009年より、鎌倉山ナワールガーデンにある竹林での活動「本気根気狸」。2010年より、葉山おひさま学童あおぞらでの「ドゥイの出張こども造形教室」。その他、各地イベントにてワークショップを考案・実施。参加者それぞれの面白さやひらめきと即興性を大切に考える、「クリエイティブな遊びの時間」を研究しています。 <http://duilab.com/>

#### ドゥイのみなさんからのコメント

看板に使うパーツの部分をみなさんと一緒につくらせて頂きました。みなさんのペースに合わせてのんびりゆったりおしゃべりしながらの作業は、大変楽しかったです。板を切ってそこに絵の具で絵を描いてもらったのですが、数々の名作がうまれました！  
通りを歩く人たちも楽しめるものに仕上がったと思います。作業を通して、同じ時間を共有することがすごく重要に感じる体験でした。

## 1 回目 | 2016年7月6日(水)

造形ユニット・ドゥイと利用者みなさんが初めて出会う初回は、まず看板についてのイメージをふくらませることにしました。カフェがどういうイメージで、看板にはどんなものが描かれているといいのか、アイデアを出し合いました。そのアイデアをもとに、最初はモビール(天井から吊り下げる飾り)を製作することに。色紙や割りばし、モール、毛糸など扱いやすい素材を使って自由に組み合わせていきます。できたものをラミネートして、穴を開け、棒につりさげられるようにしました。ひとりひとりの作品を組み合わせて、大きなモビールをつくり、共有のスペースに展示しました。

## 2 回目 | 2016年7月20日(水)

2回目は、いよいよ看板づくりに取り掛かりました。初回のモビール製作の時と同じようにそれぞれが看板のパーツをつくっていきます。まずは、コップやかき氷、メニュー、トイレマークなどそれぞれが看板にあつたらいいと思うものを紙に鉛筆で描いていきます。その後、おおまかに形を切り抜き、色を塗りました。中にはキャラクターや美空ひばりなど、カフェには直接関係のなさそうなものであっても、愛着があったり、好きなものを、利用者職員みなさんが一緒になってつくっていきま

## 3 回目 | 2016年7月27日(水)

引き続き、パーツづくりを行いました。色塗りの続きから始める人や一つ目をつくり終えてどんどん新しいものをつくっていく人など、それぞれのペースで進んでいきます。夏休み中の子どもが参加してくれるなど、ふだんから地域との関わりを持っているひふみの懐の深さも垣間見えました。ひふみの文字やCafeなど、カフェに必要な情報も考えながら、パーツを増やして行きました。終了後、設置場所や方法について打ち合わせをしました。

## 4 回目 | 2016年9月29日(木)

ドゥイのみなさんが土台となる看板と仕上げをしたパーツを持ってきました。看板は、壁に据え置くものと、自立するもののふたつになりました。自立する看板は、片面がパーツをさしこめるようになっていて、もう一方には黒板塗料が塗ってあります。黒板にはその日の予定などを書き込むことができ、機能的です。パーツには、ニス塗られ、差し込むための棒がついています。季節やイベントあわせてアレンジして使うことが出来ます。設置の様子を利用者のみなさんも見守っていて、自分たちの手でつくったものが形になるのを嬉しそうにしていました。





みどり福祉ホーム × 上村なおか  
**「からだに触れる、知る。」**

みどり福祉ホームは、1986年に横浜市緑区十日市場町に完成した施設です。横浜北部の重度重複障害者の日常を支えています。同施設には、2017年2月～3月に、ダンサー・振付家の上村なおかさんが3回にわたって訪問しました。みどり福祉ホームに通う利用者みなさんは、活動のペースにより「にじグループ」「ゆめグループ」のどちらかに属しています。このため、1日に2回ワークショップを開催。上村さんは利用者みなさんと身体を使ったやり取りを楽しみながら、動きやダンスをつくりました。



うえむら

上村なおか (ダンサー・振付家)

石川県金沢市生まれ。1991年お茶の水女子大学舞踊教育学科卒業。在学中の89年より木佐貫邦子に師事。以降、数多くの木佐貫作品に出演する。98年より笠井叡に師事。01年より自主企画ソロダンス公演をスタート。たったひとつの身体が持つ隠された可能性を追求し、国内外で公演を行う。他ジャンルのアーティストとの協働も精力的に展開する他、近年では〈笠井瑞文 × 上村なおか〉のプロジェクトも継続して行っている。各地での様々な人々とのワークショップを通して、身体の発見と冒険を実践中。05年度より桜美林芸術総合文化学群にて非常勤講師を勤める。http://www.naoka.jp/

上村なおかさんからのコメント

みどり福祉ホームは、下見の時から所長の荒木さんはじめスタッフのみなさん、利用者みなさんの雰囲気が、ゆるやか且つ生き活きとしていたと感じた。そのゆるやかさが、私たちのチームの一種得体のしれない、ダンスかもしれないものをそのままに受け取って下さり、また利用者みなさんのからだもそうと差し出してくれたように思う。それは回を重ねるに従って互いの許容と共有が広がったり深まったりして、豊かな企みの場となっていった。

期間：2017年2月6日、2月27日、3月6日

時間：10:30～11:15、13:30～14:15

施設名：障害者地域活動ホーム みどり福祉ホーム

アーティスト：上村なおか (ダンサー、振付家)

アシスタント：楠美奈生、尾形直子、宮崎あかね

施設情報：障害者地域活動ホームみどり福祉ホーム

住所：横浜市緑区十日市場町808-3

http://midori-fukusi.wixsite.com/midorifukusi

## 1 回目 | 2017年2月6日(月)

午前：にじグループ 参加者7名(途中参加1名)

利用者みなさんとは、これがはじめて。上村さんは静かに身体を動かすと、そっと近づきます。そうしてひとりひとりの触れていく身体のあいさつからワークショップはスタートしました。途中でアシスタントがタンバリンや小さなマラカスを使い、素朴で可愛い音がホームに響きます。利用者みなさんは戸惑いつつも上村さんの身体を触り返していました。

午後：ゆめグループ 参加者10名

午後は前半に行われた「自己紹介のダンス」をもういちど。お昼ごはんを食べたあとで、エネルギー満タンの上村さんは、声を発してみたりして、その音を頼りに身体を動かします。さらに、上村さんがスピーカーから口笛が印象的な曲を流すと、利用者みなさんもちょうどなく気持ちが盛り上がったよう。椅子から立ち上がる人もいれば、楽器を手に持ちリズムを奏でる人も。車椅子の人は乗ったまま踊りだし、まるでお祭りのような空間になりました。

## 2 回目 | 2017年2月27日(月)

午前：にじ・ゆめ混合グループ 7名

「今日の身体はどんな感じか、みなさんに挨拶にいきます」そういって、アシスタントとともに身体を使ったあいさつに行く上村さん。利用者みなさんの身体の動きを真似したり、手を打つ音に合わせて踊っていきます。1回目の実施を見たあとだから、施設スタッフのみなさんも一緒に身体を動かしてくれました。前回とは違う雰囲気、みんなが自分や他人の身体にぐっと集中する時間になりました。

午後：にじ・ゆめ混合グループ 9名

利用者の方の床を蹴る音に合わせて楽器を使い、ゆっくりとみんなで踊っていく上村さん。所長の荒木傑さんも、側に置いてあったウクレレを鳴らしていました。みんなが好き勝手に鳴らす音が身体の動きと合わさって、段々とパーティーのような雰囲気になってきます。アシスタントに文字盤を使って「すぎ」と伝える人もいて、ダンサーのみなさんやワークショップに少し慣れてくれたようでした。

## 3 回目 | 2017年3月6日(月)

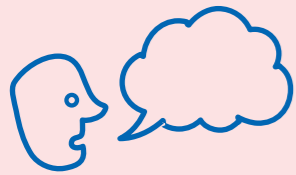
午前：にじ・ゆめ混合グループ 8名(途中参加1名)

今日もまずはあいさつからはじめる上村さん。身体を触るだけでなく、「今日は雨がふるかもしれません」などと話しかけています。利用者みなさんや施設スタッフの方々も、最後だからか、今まで以上に身体を動かしています。曲にあわせて車椅子の背もたれを倒し、イナバウアーを見せてくれる方もいました。最後は初日の午前中に流した曲をかけ、にぎやかなま終わりました。終了後の振り返りでは、アシスタントの方が言葉で意思疎通がしづらい人の手に触れた時、「指先で私を踊らせようとしてくれた」と語りました。

午後：にじ・ゆめ混合グループ 7名

午前中に引き続き、身体のあいさつからはじめ、楽器を使いながら身体を動かしていく上村さん。利用者みなさんのもいつの間にか椅子から立ち上がり、全員で大きな円になって踊り始めます。上村さんは最後に、初日にかけた口笛が印象的な曲を流します。「この曲は『君と僕』といいます。」と上村さん。曲が流れるなか、自分の身体と、相手の身体、それぞれの身体を存分に楽しんでいました。最後は、床に寝転がる人の真似をして、みんなで床にゴロンと寝転がります。みどり福祉ホームの天井を見上げ、ワークショップはおしまいになりました。





# 障害・アート・身体を考える報告会

昨年度、STスポット横浜は、横浜市内におけるふたつの福祉施設と芸術家のワークショップをコーディネートしました(取組みの様子はp02-p05)。実施が終わったのち、受け入れを担当して下さった福祉施設職員の方をお招きし、取組みの内容や実施を通して感じたことなどをお話していただく報告会の場を設けました。このページでは、福祉施設側から感じたワークショップについて、ざっくばらんにお話いただいた様子をご紹介します。

DATA 2017

3.8(水)

## 福祉施設での実践報告～芸術家とともに過ごす時間～

ゲスト：中村麻美さん(地域活動支援センター ひふみ 施設長)  
荒木傑さん(障害者地域活動ホーム みどり福祉ホーム 所長)



ひふみでは誰でも参加できるご飯も行われている。



「このワークショップでは、2016年7月に1階にオープンするカフェの看板を作りたいとお願いしました」と中村さん。とはいえ、初めての試みのため、利用者みなさんとアーティストがコミュニケーションをとるために、まずはモビール(天井から吊り下げる飾り)を作ることから始めました。

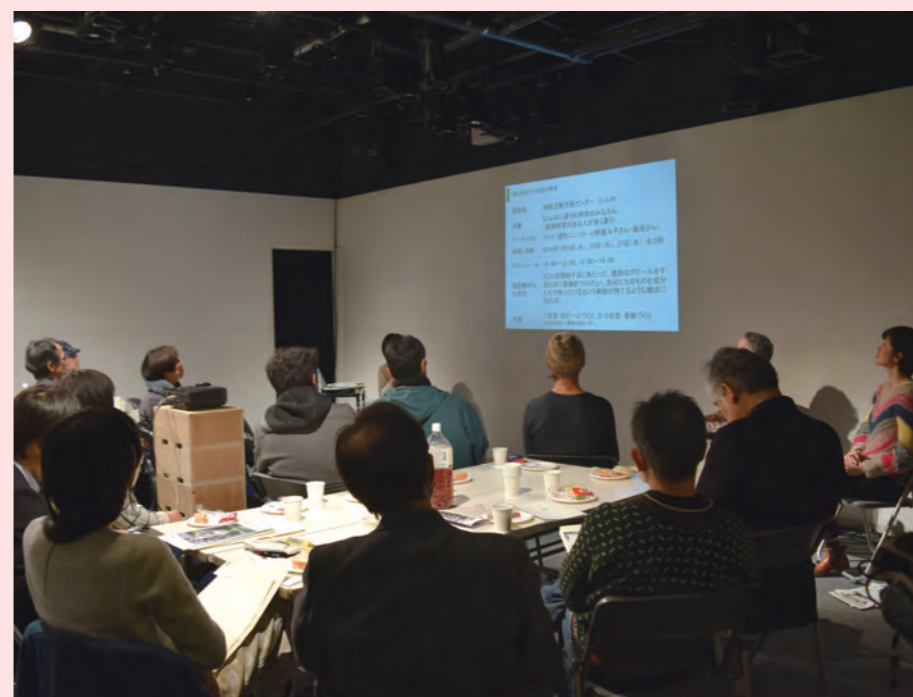
中村さんはワークショップを振り返り、「利用者みなさんは、特別にアートやものづくりに興味津々の方たちばかりではありません。私としてはやりたくない人に、義務的にやらせることには抵抗があったので、基本的にはやりたい人に参加してもらいました。でも実際やってみると、みなさん、黙々とモビールや看板を作っていて、予想外の盛り上がりで私自身驚きました」と語ります。出来上がったモビールは1週間ほどイベントスペースに飾り、「みんながなんとなくジャマだと思いつつ避けて通ったり、ちょっといじってみたりしている感じが面白かったです。それでもそのままにしていたので、気に入ってたんじゃないでしょうか」と中村さん。

さらに中村さんは「ひふみは寂れた商店街のなかにあります。

そのなかで『私たちは元気ですよ』とアピールしていきたいんです。精神障害のある人は、一般的に暗いとか何を考えているか分からないと偏見を持たれることも多いです。が、コミュニケーションにおいて少し不器用なところはあるけれど人生経験豊富で人として魅力的な人も多く、私としては『みんななんかやがあるけど元気だよ』ということ『ここにいます』という存在として伝えたいと思っています。ですので、カフェの看板のほかにも、立ち寄った人がくつろげるベンチなどを、今回関わってもらったアーティストのドゥイのみなさんに作ってもらえるよう頼んでいます」とワークショップが終わった後も、関係が続いていることを話しました。

次に「今日はみどり福祉ホームの利用者のみなさんがどれだけ素敵かを話します」と荒木さん。「利用者みなさんは、言葉は発しなくても、僕たちの言葉をちゃんと聞いてくれている。僕たちと同じで、いろんな人がいて、十人十色の性格がある。ただ障害があるというだけなんです」と語ります。

今回の実施では、まず職員さんにどうワークショップを理解しても



みどり福祉ホームでは広報誌「みどり福祉ホーム通信」を発行している。

らうかというのを考えたそう。「職員に『ダンスのワークショップをしたい』と伝えたら、『振り付けを覚えたりするんですか?』とザワつきました。対外的な対応の経験が豊富で、利用者の皆さんのメリットになるのなら、大抵のことはOKしてくれそうな職員を窓口にして、実施までに何度も相談を重ねました」と荒木さん。実際に実施がはじまってからも、iPadで撮った動画を見て、振り返りを行っていたそう。「障害のある人にとって、何か新しいインプットを得る環境づくりは、大切なことですが、難しいことでもあります。ですから、利用者みなさんにとって初めての体験ができたのはとても良かったことです。最初は不安そうにしていた方も、3回目にはダンサーの上村さんたちを待ち構えていました」

さらに荒木さんは「上村さんたちは、ものすごいスピードで利用者みなさんの名前を覚えていった。それも下の名前前で覚えてくれました。それは、ダンスや身体を通して、きちんとひとりひとりを感しているという証拠だと思います」とも語りました。

日時：2017年3月8日(水) 19:30～21:00  
場所：STスポット(横浜市西区北幸1丁目11-15 横浜STビル 地下1F)  
参加者：21名  
地域活動支援センター ひふみ  
[http://www.ura-shima.com/sisetsu.html#hihumi\\_sisetsu](http://www.ura-shima.com/sisetsu.html#hihumi_sisetsu)  
障害者地域活動ホーム みどり福祉ホーム  
<http://midori-fukusi.wixsite.com/midorifukusi>

**ひふみ×美術**  
地域活動支援センター ひふみ(横浜市神奈川区)は、精神障害のある人が地域の中で安心して生活するための居場所づくりを目指している。同施設では2016年6～7月に、小野亜斗子さん・轟岳さんによる造形ユニット、ドゥイによるワークショップを実施。施設に新設されるカフェの看板づくりを3回で行った。(詳細はp02-p03)

**みどり福祉ホーム×ダンス**  
障害者地域活動ホーム みどり福祉ホーム(横浜市緑区十日市場町)は1986年に完成した、重度重複障害者の日常を支える施設。同施設には、2017年2月～3月に、ダンサー・振付家の上村なおかさんが3回に渡って訪問。利用者みなさんと、身体を使ったやり取りを楽しみながら、動きやダンスをつくった。(詳細はp04-p05)

# 障害・アート・身体を考える勉強会



Report

1

現場の実践を通して、障害とアート、身体表現にまつわる勉強会を全部で5回行いました。

各回、障害のある人との創作活動の実践があるゲストをお招きし、事例紹介やディスカッションを行い、アーティストやコーディネーター、障害福祉や文化芸術関係者など、さまざまなバックグラウンドを持つみなさんにご参加いただきました。ここでは、その様子をご紹介します。

DATA 2016

12.13 (火)

## 子どもと子どもが交わること

ゲスト：久保田菜々子さん（特定非営利活動法人芸術家と子どもたち コーディネーター）



この日は「子どもと子どもが交わること」として、特定非営利活動法人 芸術家と子どもたちでコーディネーターとして活動する久保田菜々子さんにお話を伺いました。

久保田さんは東京都内の公立小・中学校等を中心にアーティストを派遣し、先生と協力しながらワークショップ型の授業等を実施するASIAS(エイジマス:Artist's Studio In A School)の活動に携わっています。勉強会では、ASIASの活動の一環である特別支援学校でのアーティストと子どもたちの取組の紹介をもとに、障害のある子どもたちとの芸術を介した関わりをお話いただきました。

参加者からは「学校に派遣するのは、なぜアーティストでないといけないのか」との質問も。アーティスト・ワークショップの場で障害のある子とない子が交わることについて、久保田さんは「子どもたちから出てくる表現を大切にすることで、より個と個のふれあいが深まり、心的な繋がりを持つ機会が増すのではないかと考えています」と語ります。さらに、「障害のある子、ない子という境界をとっばらって、一人の表現者として向き合えるアーティスト・ワークショップでは、助け合いや支え合いとはまた違った交

流の可能性が発見できるのではと思います」とも話しました。

このほか、会場では「こうした活動は、子どもたちだけでなく、アーティストや先生にとっても貴重な体験だ」「外部からきたアーティストが関わることによって、新たに見える視点もあるのではないか」といった意見があがりました。

日時：2016年12月13日(火) 19:00～20:30  
場所：STスポット（横浜市西区北幸1丁目11-15 横浜STビル 地下1F）  
参加者：23名  
芸術家と子どもたち <http://www.children-art.net>

**久保田菜々子(くぼた ななこ)**  
1989年東京生まれ。国際基督教大学教養学部卒業。学校現場の情報化を推進するコンサルティング会社に勤務後、学生時代からボランティアスタッフとして活動に参加していた、NPO法人芸術家と子どもたちのコーディネーターとして2014年より活動。東京都内の公立小・中学校を中心に現代アーティストを派遣し、ワークショップ型の授業等を実施するASIAS(エイジマス)の活動に主に携わる。

# 障害・アート・身体を考える勉強会



Report

2

DATA 2016

12.17 (土)

## さまざまな人が集う場所

ゲスト：笹田夕美子さん（浜松市発達医療総合福祉センター 臨床心理士）



「むりやり母の日」、「発電しようWS」、「アトリエまぜまぜ」などユニークなタイトルのワークショップを数多く開催する『ぶっとびアート』。この回ではぶっとびアートの企画者のひとりである、臨床心理士・笹田夕美子さんにお話を伺いました。

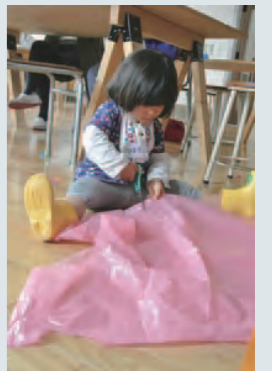
ぶっとびアートは、“おとなと子どものあそびゴコロをくすぐり本気であそんでみる場”として2005年に誕生。0歳からおとなまで、障害のある子もいない子も、おもしろ好きな人なら誰でも参加できます。2016年12月までに行われたワークショップは、なんと通算120回にも及ぶそうです。

会場では、2014年11月に行われたワークショップ「おもしろ楽器をつくって賞をとろう!」でのグランプリ作品の映像を紹介。鬼のお面をかぶり、その顔をバンバンと叩くことで音を鳴らす「おにがっき」など、おもしろ楽器とそのパフォーマンスに参加者からも笑い声が上がります。

笹田さんはぶっとびアートについて「子どもとのワークショップなんだけれど、子どもをとりまく大人たちが健全であるためのワークショップでもあり、それが巡り巡って子どもの健やかさにつながるべいなと思っています。大人も、子どもと関わりながら子ども時代の自分の育て直し・育ち直しを行っていると思うんです」と語ります。

参加者からは「健常者と障害のある子が、差を忘れてしまうくらいのもので作るのにはなぜ」という質問がありました。笹田さんは「参加者の年齢幅が大きいことが、学校などの均一化された集団と異なり、差があっても当たり前という状況になっていると思います。広報は、公民館のほか、支援学校にもチラシを送付しています。また、こうしたイベントをやろうと思うと、施設側が健常の子と障害のある子

の人数差を気遣ったりするのですが、そこは『人数に差が出て大丈夫ですから』と丁寧に説得しつつ、実際の現場は入れない子や混乱した子が出た場合の準備を整えて臨みました」と話しました。



日時：2016年12月17日(土) 14:00～15:30  
場所：急な坂スタジオ 和室（横浜市西区老松町26-1）  
参加者：9名  
ぶっとびアート <http://buttobi.hamazo.tv/>

**笹田夕美子(ささだ ゆみこ)**  
浜松市発達医療総合福祉センター臨床心理士。日々、発達の遅れのある子どもたち、ご家族、幼稚園や学校の先生方との相談・支援に従事。2005年から村松弘美さんと「ぶっとびアート」という任意団体で、ユニークな特性をもつ子どもたちと子どもを取り巻くおとなの「あそび心」をくすぐる場作りワークショップを行っている。子どもの専門職の団体「みらいTALK」で障がいをもつ子の防災サバイバルキャンプ等の活動も実施している。



DATA 2017

1.30 (月)

重度重複障害のある子どもたちと美術・音楽の関わり

ゲスト：井上尚子さん(美術家)、柴山拓郎さん(音楽家)



2017年最初の勉強会では、特別支援学校の子どもたちと美術・音楽を使ったワークショップを行った、井上尚子さんと柴山拓郎さんにお越しいただきました。

会場では、全4回のうち2回を終えた特別支援学校での取組を紹介しました。1日目は、気づきと体験の時間として、マーブルチョコレートを使用したワークショップを展開。チョコレートを食べるまでの所作と匂いをじっくり味わい、筒の蓋をあける音や、先生がチョコレートを食べたときの咀嚼音を聴きました。

2日目のワークショップでは、柴山さんが1日目の音を録音・編集した音楽を皆で聴きます。その後、オレンジを使い、皮を剥いてみたり、ビニール袋に入れた果実を潰したりする体験を行いました。井上さんは「先生と子どもが、お互いの存在を音と匂いを使って確かめる体験になりました。障害があっても、子どもの反応は十人十色で、健常者と全くかわらない。それがうれしかった」と語りました。また、柴山さんは「最初、吸引器の音を録音しようと思ひ、少しためらった。しかし、子どものなかには『痰を吸ってもらえると楽になれるから、吸引の音が好き』という子もいた。些細なことだが、実際に現場にいかないと聴けない意見、考えがたくさんあり勉強の連続です」と話しました。

日時：2017年1月30日(月) 19:00～20:30  
場所：STスポット(横浜市西区北幸1丁目11-15 横浜STビル 地下1F)  
参加者：27名  
井上尚子 <https://www.facebook.com/hisako.inoue.5>  
柴山拓郎 <https://www.facebook.com/takuro.shibayama.14>

**井上尚子(いのうえ ひさこ)**  
1999年女子美術大学大学院美術研究科版画専攻修了。2005年文化庁芸術家在外研修員として1年間NY在住。現在横浜在住。環境、文化、歴史を匂いから楽しむ「くくんウォーク」を教育機関、美術館、図書館、植物館、企業、公園、空港など日本全国で開催。2006年からアーティストや様々な研究者、異業種の方々とコラボレーション制作。2011年から視覚障害と聴覚障害者とのコラボレーションプログラムも開発しワークショップを開催。NPO法人に在籍しクレヨン監査。

**柴山拓郎(しばやま たくろう)**  
1971年東京生まれ。東京音楽大学・同大学院(作曲専攻)を経て、東京芸術大学大学院美術研究科博士課程(先端芸術表現領域)修了。修士(音楽)・博士(美術)。2008年よりSaitama Muse Forum(SMF)の設立・運営に携わり、数多くのワークショップやシンポジウム等を企画運営してきた。また認知科学者・工学者との協働を通じた言語学・社会学・認知科学的な視点からの創作表現の拡張に取り組んでいる。作品はコンピュータ音楽・サウンドアートを中心とし、国内外(Multiphonie, ICMC, ISMIR, SoundLiveTokyo, FAF等)で演奏・展示される。現在東京電機大学理工学部情報システムデザイン学系准教授、国際基督教大学非常勤講師。2017年4月からドイツのZKMで1年間制作を行う。



DATA 2017

2.28 (火)

知的障害のある子どもたちと演劇の関わり

ゲスト：花崎攝さん(演出家)



今回は特別支援学校での取組をもとに、花崎攝さんをゲストにむかえ、知的障害のある子どもたちと演劇の関わりについて勉強会を行いました。

花崎さんは、3日間にわたり、知的障害のある中学生13名、先生7名と20分の演劇を創作しました。子どもたちの障害の程度はさまざまで、担当の先生とやりとりを重ねながら方針を固め、進行していきました。発語が苦手な生徒や、視覚障害のある生徒でも楽しめるようにわらべうたの「おふねはぎつらこ」や「なべなべ底ぬけ」を導入としました。言葉と身体の動きを連動させることを楽しみ、次に新たな状況を加えていきました。波が高くなると船が揺れることから、本歌の歌詞を変えて、「おふねはゆーらり」などと、自由にわらべうたをアレンジしていきました。3日目にはさらに、「ややこしや、ややこしや」とリズムの良い語りなども加えました。そうして、動物たちが乗った船が島に辿りつくまでの冒険を描いた「ヒトリ号の冒険」という物語が出来上りました。中学生と先生たちは、物語の中で演技手になり、同時に仲間が演じるのを見ながら、物語の登場人物として船旅をしていきました。花崎さんは「進行の流れを先生たちと共有できたことで、一体感を持って創ることができました。子どもたちは、それぞれ理解しているポイントや理解の仕方に違いがあるのですが、全体として物語を共有する時間になりました」と語ります。

また、花崎さんは、「障害があるというのは、偏りがあるということなんじゃないかと思っています。偏りがあるということでは私も同じかもしれ

ない。演劇では偏りが楽しみになります。配慮というのはあまり考えていなくて、目の前の人と何が出来るのかということだけを考えて、現場に飛び込んでいます」とも語ります。

さらに、「物語のなかで船が島にたどり着いたときに、特に練習はしていなかったのだけれど、思わずみんな『エイエイオー』と歓声をあげてしまった。私がいろいろな人と演劇をしているのは、社会的な意味や意義を語ればいろいろあるけれど、何よりも楽しくて楽しくてたまらないから。死んじゃいそうなくらい楽しいです(笑)」と演劇を続けている動機についても教えてくださいました。

日時：2017年2月28日(火) 19:00～20:30  
場所：STスポット(横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビル 地下1F)  
参加者：43名  
花崎攝 <http://www.edg.or.jp/hanasaki.html>

**花崎攝(はなさき せつ)**  
シアター・プラクティショナー/演劇デザインギルド。野口体操講師。応用演劇の実践を中心に国内外で活動。主な仕事に水俣病公式確認50年事業、創作劇「水俣ば生きて」構成演出(2006)、インドネシア(アチェ)で紛争後の和解と再生にむけた青少年の演劇ワークショップ(2007～2010)企画進行。障害のある人たちの演劇グループ「みなせた」(2008～)。フィリピンで環境演劇活動、および世田谷パブリックシアター主催「地域の物語」の企画進行を担当中。ロンドン大学芸術学修士。企業組合演劇デザインギルド専務理事。武蔵野美術大学、日本大学芸術学部、青山学院大学非常勤講師。

# 障害・アート・身体を考える勉強会

Report  
5

DATA 2017  
3.26 (日)

## ダンスと演劇から老いを見つめる

ゲスト：砂連尾理さん(ダンサー・振付家)、西尾佳織(劇作家・演出家)



今年度最後の勉強会は、障害を考える上でひとつの手立てになるものとして、老いをテーマにアーティストふたりによる対談を行いました。特別養護老人ホームでのワークショップをもとにしたダンス公演を行った砂連尾理さん、変化や過ぎ行くものをテーマとした作品の上演を控えている西尾佳織さん、お二人の活動を伺いながら、老いをキーワードに、ダンスと演劇から見えてくる身体について話を進めていきました。

### 砂連尾理 じゃれお おさむ

1991年に寺田みさことダンスユニットを結成。08年度文化庁・在外研修員としてドイツ・ベルリンに1年滞在。近年はソロ活動を中心に、ドイツの障がい者劇団ティクバとの「Thikwa + Junkan Project」、舞鶴の高齢者との「とつとつダンス」、濱口竜介監督映画「不気味なものに触れる」、オペラ「ドン・キホーテ」(演出：菅尾友)の振付等、また著書に「老人ホームで生まれたとつとつダンス」-ダンスのよくな、介護のよくな- (晶文社)がある。

### 西尾佳織 にしお かおり

劇作家、演出家、鳥公園主宰。1985年東京生まれ。幼少期をマレーシアで過ごす。2007年に鳥公園を結成し、脚本・演出を担当。鳥公園以外の主な参加作品としては、F/T14主催プログラム「透明な隣人〜8エイト〜によせて〜」(作・演出)、SPACふじのくににせかい演劇祭2015「例えば朝9時には誰がルーム51の角を曲がってくるかを知っていたとす」(脚本・共同演出)など。2017-2018年度公益財団法人セゾン文化財団ジュニア・フェロー、アトリエ劇研 アソシエイトアーティスト。



## 老いに開かれたダンス／関係性から見える老い

**砂連尾**：今日は老いというテーマですが、最初に断っておくと、僕は障害のある人や高齢者とずっとダンスをしてきたというわけではありません。僕が関わるダンスは、ポストモダンダンスという文脈になると思うのですが、これは、非差別のポリシーからくる「デモクラシーの身体」や「すべてのものにダンスが開かれていく」という思想を持ったダンスで、ダンスのオルタナティブな在り方を提示しました。僕は当初は身体能力の高いダンサーと踊っていましたが、40歳を過ぎた頃から、障害のある人や高齢者と踊っています。そういう観点からいうと、いろいろな身体の人と関わりながらダンスの可能性を探り、ダンスと社会の関係に興味があるのだと思います。西尾さんはおばあさんをテーマにした作品を作られているんですよね？

**西尾**：はい。私は鳥公園という劇団で、脚本を書いて演出をしています。鳥公園では2010年に『おばあちゃん家のニワオハカ』を、2012年には小鳥公演『すがれる』という作品を上演しています。どちらも高齢者が出てくる作品で、前者では若い男性がおばあさんの役を、後者では若い女性がおじいさんの役を演じました。特に『すがれる』は、老いというものは人との関係性のなかで感じさせられるものなのではないかなと思いつつ作ったもので、本人が演技で高齢者のように見せるのではなくて、人に身を委ねるとか、体重を預けるとか、どのように扱うか・扱われるかという相手との関係性のなかで老いを表現できるのではないかなということをやりました。

## 老いることは自由になることなのではないか

**砂連尾**：『すがれる』を上演してから、5年が経ちますが、老いについての認識が変わったことはありますか？

**西尾**：当時は“老人”というものがいて、私は“老人”でないものという認識だったので、最近では自分の祖母と話していくにつれ、「ああ、老いたことのある人はいないんだなあ」と考えが変わりつつあります。祖母も日常のなかで知った新しいことをいろいろ話してくれて、老いを更新しているんだと思うようになりました。その一方で、祖母がだんだんさまざまなことを忘れていったときに、なんとというか、自己同一性が緩んでいく感じがして、随分おらかだなあと思ったんです。「自分が誰なのかも忘れてしまいました」というのは自由なことなんじゃないかと。

**砂連尾**：老いていくことで自由になるということですけど、僕が障害のある人や高齢者と一緒踊るなかで、いわゆる健康者である舞台人の方が、観客から「見られる身体」であることに常に囚われているなということを感じます。最初にダウン症の方と踊ったとき、囚われの少ないとても自由な身体だと思ったんです。自閉症の方々も、日常と舞台上の身体が分け隔てなく、同一線上で生きているように感じました。西尾さんは、実際におばあさんと関わるなかから、高齢者の自由さみたいなものを感じ取ったのでしょうか。

**西尾**：そうですね、どうしても俳優の人たちは、なにかになりたいとか、舞台上の身体みたいなものがあると思います。でも、もうちょっと立派でない、もっともらしくないあり様のなかに尊さがある……ということをやれないかなと思っていました。

**砂連尾**：社会的には、社会的弱者である「障害のある人や高齢者を大事にしましょう」というケアの意識があると思うんですけれ

ど、僕はこと舞台上での関係性という、全くそういう考え方で彼らと付き合っていないと思います。ただ単純に一人の人間として彼等と向き合い、僕には持ち得ない佇まいや、彼ら特有のわざがすごいから盗みたいという想いが入り口にありました。まず、最初に関心を持ったのが彼等の自意識の少ない身体ということだと思っています。実は僕は10年ほど前から合気道をやっているのですが、自意識のある身体は後手後手に回るんですね。それが生きていく上では悪いというわけではないけれど、舞台に立つ人はどうしても観客の視線や想定する意識を先に考えていて、その準備が却ってリアリティの弱い身体になってるんじゃないかなと感じることがあります。でも、障害のある人や高齢者は、そうした意識が全然ないという言い過ぎだけれど、囚われが少なく捨て身なところがあるので、そこがとても魅力的だと思います。

## フィクションから見えるリアリティ

**西尾**：人間の身体の限界について話すとすると、スピリチュアルな感じなりそうな気がするんですけど、砂連尾さんは、人間って何歳くらいまで生きられると思いますか？

**砂連尾**：僕は今52歳なんですけど、実際の時間よりはかなりゆっくりゆっくり時間を使って生きている気がするんですけど、どうも僕自身は52年生きた感じがなくて、まだ38年くらいじゃないかなって(笑)。そう思うと、120歳くらいまでは生きられるんじゃないかなって。

**西尾**：私も同じ感じで、人間の寿命は70歳から80歳くらいって、みんな外から知識を与えられてイメージを埋め込まれて思い込んでいるからそうになっているだけで、本当は人の寿命ってもうちょっとバラバラなんじゃないかなって思っています。

**砂連尾**：今思い出したんですが、ちょうど高度成長期がはじまる1968年ごろから、狐に化かされる人がいなくなったって話を内山節さんの『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』という本を読んで知ったんですが、それはつまりキツネや妖怪といった人々の暮らしの中で育まれた共同幻想が失われたことを意味し、同時に「狐に騙された！」って思う人が社会で生きられなくなっていったんだと思うんですよ。みんなフィクションよりもどんどんお金に取り憑かれていったという話。それで、今日西尾さんと話しながら思ったんですけど、日常のなかに存在しているフィクションって、我々は案外見失っているんじゃないかなと。もしかしたら、老いや障害をそういった側面から捉え直すことで、いままで素通りされていたある種のフィクションや感性みたいなものが再び新たな形になって見えてくるのではないかなと思っています。

日時：2017年3月26日(日)14:00～15:30  
場所：STスポット(横浜市西区北幸1丁目11-15 横浜STビル 地下1F)  
参加者：28名  
砂連尾理 <https://www.osamujareo.com/>  
<http://www.shobunsha.co.jp/?p=4066>  
西尾佳織 <https://www.bird-park.info/>



# 座談会「からだから考える演劇」



2017年1月15日、認定 NPO 法人ニコちゃんの会事務所にて



福岡で「どんなに重い病気や障がいがあっても、その人らしい心豊かな人生を生き抜く」をコンセプトに活動している認定 NPO 法人ニコちゃんの会。2014年より身体に障害のある人たちとの演劇活動を始めています。その発展した形である「身体的にパラエティあふれるひとたちの演劇公演 BUNNA」の稽古を拝見し、プロデューサーの森山淳子さん、演出の倉品淳子さん、福岡でさまざまな人たちと演劇の関わりを持っている俳優の古賀今日子さんのお話を伺いました。さまざまなからだから見えてくる演劇のお話は、芸術と福祉の関わり方についても考える時間となりました。

聞き手：小川智紀（特定非営利活動法人 ST スポット横浜 理事長）

## たどりつけないもどかしさ

**古賀**：BUNNAは、長くやられていますよね。どれぐらいですか。  
**倉品**：結構やっていますね（笑）。そんなにやるつもりなかったんですけど。2014年からスタートしました。オーディションを兼ねたワークショップが始まりです。翌年2015年に福岡で上演し、2016

年から2017年に横浜、大阪、奈良でツアーし、再び福岡で凱旋公演を行う予定です。ただ、まだまだ自分がやりたいと思っていることにはたどり着けていない感じがします。特に初演の時は、観客のみなさんが優しすぎるんじゃないかと思いました。  
**小川**：それは、なんでですか。  
**森山**：障害のある人が出ているからだだと思います。開演前にも

「拍手しないでください」ってお願いしたりしました。アンケートの回収率もとっても良くて裏まで書いてあるんですよ。「出演者には見せないように」と倉品さんに言われました。  
**倉品**：学校などで、この子は大丈夫かなって思った子が、人前に立って、ちょっと「あー」って言うだけで、「わあ！」って喜んじゃうんですよ。そうすると、本人はやった気になってしまう。「いや、できてない」って伝えることから始める。  
**古賀**：反応があると、ついそう思っちゃうんですよね、俳優って。  
**小川**：お客さんはどういう人が集まってそういう反応になるんですか？  
**森山**：教育関係者、福祉関係者で客席が埋まってしまったら、ちょっといやだなと思っていたんですが、意外とそうでもなかったんです。それよりは、演劇に興味のある人だったり、出演者の知り合いだったり、いわゆる一般の人たちでした。障害のある人たちと関わったことも、あるいは見たこともない人たちが見て、大きな衝撃を受けていたようでした。

## 俳優から立ち上げる演出

**古賀**：稽古を夢中で見ちゃいました。すごい面白かったです。稽古を見ながら芝居したいなと思いました。  
**小川**：何が面白かったんでしょうね。僕もすごい面白かったです。みんなで仲良しで楽しいね、みたいなことじゃないんですよ。ちゃんとやり合ってる演劇の現場だと思いました。

**古賀**：倉品さんが俳優であり、演出家であるということが演出の方法に大きく影響していると思いました。演出だけをしている演出家とは違うんですね。動機とか中身のことをすごく伝えてます。こうやって物を落とすか、ここに力があって、こうやるか違うんだよって何度も話して、役者の中で起こっていることを伝えるというか。演出家のやってくれそうにないことで、とてもわかりやすいと思った。自然に自分が役者として、こういうシーンがあったら、こうするなって思うことを、外側から「こうして」っていうんじゃなくて中で起っていることを言葉にして言ってくれるので、俳優をやってきたからこそできる演出方法だと思いました。俳優としては、チャンネルが合わせやすい。  
**倉品**：人によるかもしれませんが、たぶん、演出家って、やって見せる人と絶対やらない、もしくはやれない人がいるんですよ。「ボクはできないけど、キミは俳優だからできるんでしょ？」という感じで。結果的にそういうものを出して欲しい、みたいなの。私はちょっと真ん中だと思っています。だけど、どうしても、俳優上がりだとして見せたくなくなってしまうんですけど、最近はやらなければならないようにしてくてる、なるべくね。  
**森山**：でも顔の表情がね。  
**古賀**：顔の表情とかね。  
**倉品**：一回やってみると「へっ!？」と分かる時もあるんですよ、やっぱり。  
**古賀**：役者の内側にある衝動が起こる最初のスイッチを絶妙に押していて、「やってみて」みたいな感じにするのが、すごい面白いです。

## できない身体に思いを馳せる

**小川**：人によってそのスイッチが違うと思うのですが、今回は「身体的にバラエティあふれるひとたち」という中で、足がとにかく動かないとか、腰が痛いとか、口が回らないとかってときに、倉品さんが身体で提示して、具体的に動いたのが伝わるのを見てると、やっぱりからだのことをやっているんだなというところも感じましたよね。

**倉品**：そうですね。歩けないからといって歩く稽古ができないわけではないんです。最初のころは、車椅子の人に、あるいは全身が硬直している人に、「さあ手を回してごらん」とか言っても、なんか苦情が出るのかなと思ってたんです。

**小川**：出るんじゃないですか。

**倉品**：それが、全然出ないんですよ。「はい、みんなで歩いてみよう」というのも文句言われるのかと思ったら、まったくないんです。最初はちょっとそういうことをいろいろ考えて、みんなができるものをもって、思ってたんですけど、最近は全く考えないんです。「はい、じゃあ腰回してみようか」と言って、みんなで腰を回し始めるんですけど、車椅子の子だけやっていないように見える。でも、実は彼の中ではちゃんと腰を回しているんです。大事なのは、彼が彼自身の身体に思いを馳せることだと思う。身体や関係、空間などに思いを馳せるというのが俳優の仕事なんじゃないかな。

## さらに繋がるための準備

**森山**：今私たちは数年かけて、身体に障害がある人には、医療的なフォローも含めて、何がいつ起こっても大丈夫という体制を備えてきました。でも知的障害のある人たちや、精神障害のある人たちへのアプローチはまだ用意できていないかなと思っています。その人たちと芝居を作るってなると、スタッフ側でちゃんと責任を持たないといけないと考えています。

**倉品**：実は、今のメンバーの芝居の中でも「セリフは変わってもいいよ」という大前提があるんです。全部ガチガチにしたら、緊張した姿を見せてしまうことになる。たとえば、知的障害や精神障害のある人が出演するならば、出ても出なくても成立する役をみんなで作ればいんだと思っています。

**森山**：そういったことを倉品さんが考えられるように、スタッフ側は、専門家の協力など、臨機応変に対応できる体制づくりが必要です。それができないうちには、手を出してはいけないなと思っています。

**古賀**：芸術が先か、福祉が先か、みたいな話もありますが、両方のことを考えながらつくられていくんですね。

**森山**：そうなんです、どっちかじゃない。演劇を作りたい気持ちもケアしたい気持ちも両方があります。何が一番大事かという、この人たちの日常と非日常を織り交ぜて、ちゃんと充実して豊かな物にしていくこと。ニコちゃんのキャッチフレーズの「こころ豊かにすぞす」ということなんです。本人も家族もスタッフも、各々の現実で豊かになる現場にしたいというのが目標です。



### 認定 NPO 法人ニコちゃんの会

どんなに重い病気や障がいがあっても、その人らしい心豊かな人生を生き抜くことができる社会を目指し、活動している団体です。芸術・研究・啓発・介護(日々の生活のサポート)など多岐にわたる活動を、障がい児の親をはじめとし、医療・デザイン・舞台・教育など幅広い分野のスタッフで企画・運営しています。http://www.nicochan.jp/

### 倉品淳子(くらしな じゅんこ)

劇団山の手事情社所属。俳優、演出家。多ジャンルのアーティストとのユニット「門限ズ」メンバー。イギリス、ドイツ、ポーランド、ルーマニアなど、海外での公演も多数。演出作品「よろぼし」(主催明治安田生命エイブル・アート・ジャパン)、えずこシアター公演「牡丹灯籠」(韓国光州平和演劇祭招聘作品)など多数。2004年から60歳以上の女性と、2015年から障がいを持つ俳優との創作活動を継続的に行っている。小・中学校など教育現場でのワークショップも多数。2012年から桜美林大学非常勤講師を務める。

### 古賀今日子(こが きょうこ)

女優。九州大谷短期大学演劇放送コース卒業後、1998年から2011年まで「ギンギラ太陽's」のほぼ全ての作品に出演。2004年より、福岡市内の小中学校でのワークショップや、中高生向け演劇ワークショップ、「こがきよと一緒に考えよう」などを進行し、シンプルでキャッチーなパフォーマンス系ファシリテーターとして、演劇の関口を広げている。2008年より専門学校の演技講師、大学の非常勤講師としても活動中。

## 「障害と身体をめぐる旅 ～実践から考える～」

編集 田中真実、加納美海(特定非営利活動法人 STスポット横浜)

編集協力 大島康彰

デザイン 栗谷川 舞(STUBBIE DESIGN)

印刷 平井印刷所

発行 特定非営利活動法人 STスポット横浜

〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビル地下1階

発行日 2017年3月31日

文化庁委託事業「平成28年度戦略的芸術文化創造推進事業」

主催 文化庁、特定非営利活動法人 STスポット横浜

企画制作 特定非営利活動法人 STスポット横浜

### 本事業についてのお問い合わせ

特定非営利活動法人 STスポット横浜

〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビル地下1階

TEL:045-325-0410 FAX:045-325-0414 MAIL:community@stspot.jp